

ふるさと見て歩き

第65回

ブラジル土産のワニ



▲ワニのはく製（メガネカイマンとみられる）

美和山村開発センターの玄関に置かれていた大きなワニのはく製。これは旧美和村高部出身の大森浅寿氏から贈られた物です。このワニの由来についてご紹介します。

◆ブラジル移民

日清、日露戦争の勝利により近代化を押し進める日本は、一方で財政基盤の大半をいまだに農民から徴収する地租に頼っていました。農村への負担の増加により都市へと人口が

流出し、人口過密となった都会では労働力の受け入れが追いつかず、失業者が増加していました。

当時、ブラジルではコーヒー栽培のための人員をアメリカからの人身売買により補充していましたが、一八八八年に奴隷の売買が禁じられたため労働力が不足していました。日本からの移民はそれを埋める労働力として期待されていました。

海外への移民は明治元年（一八六八）にすでに始まっています。行き先はハワイでした。しかし、雇用主からの移民への虐待が報じられたため、政府として積極的に推進することはありませんでした。

それから四十年後の明治四十一年（一九〇八）、政府公認の、最初のブラジル移民七百九十一人が「笠戸丸」に乗り込み神戸港から出港しました。笠戸丸は、その三年前の明治三十八年に東郷平八郎率いる連合艦隊がロシアのバルチック艦隊を破った日本海海戦での戦利品として得た船で、もとは病院船でした。外務省移民局が中心となって、「ゴーチー」を「金のなる木」と宣伝し、日本で厳しい生活を強いられた人々を勧誘しました。

ブラジルへ移民した人の総数は正確には把握できませんが、その数は笠戸丸以来、十三万人とも十八万人ともいわれています。

太平洋戦争が始まると、連合国側の立場をとるブラジルは日本を敵国とみなし、移民たちは危険にさらされるようになっていきました。日本

人であるという理由で地区から立ち退きを迫られたり、日本語の使用を禁じられたり、収監されることもあったようです。敗戦後もブラジル移民たちには正確な情報が伝えられず、日本の勝利が伝えられたり、一九五〇年代までブラジルの日本人学校では戦中の皇国教育に基づく教科書が使われていたりするような状況でした。当初はブラジルで成功して日本へ帰国するつもりだったブラジル移民たちは、ブラジルに住むことと葛藤しながらも徐々に精神的にも同化していったといわれています。

◇大森浅寿のブラジル移住

大森浅寿氏は、明治三十一年（一八九八）高部東河戸字梅ヶ草の農家に生まれました。大森氏の手記によれば、昭和三年（一九二八）、三十才の時、家族と共にブラジルに移住し、コーヒー農園を始めたことが分かれます。ブラジル最大の都市サンパウロ市内のサンジョアキンに三年いたのを皮切りに、不作や流行病などによって四方所の耕地を転々とする苦難の日々を過ごしました。昭和十二年に当時の居住地タクアリンガ市に日本人会を創設、初代会長となり、その頃には農業は人を雇って行うようになっていました。日本語教育ができる教員を配置するともに、青年会を組織し柔剣道の指導にあたり、自ら師範を務めています。のちにサンパウロ市内に大森商会という自動車整備工場を開業し、成功

します。

ブラジルと日本を結ぶ長年の活動が認められ、昭和四十四年に海外日系人大会が主催した日本訪問団の一員に選ばれ、大森さんは移住以来初めて日本に帰国しました。四十一年ぶり、七十二才になっていました。一時帰国の際、大森さんはブラジルに移住する契機や移住後の生活、そして日本への一時帰国のことについて手記を残しています。そこには、懐かしい美和村に、当時日本では珍しかった二メートルを越えるワニを贈ったこと、同じ物を眞平にも贈り、喜ばれたことが記されています。



▲中央が大森浅寿さん、左は長姉のハツさん、右は末妹の川西きくさん

※大森正行さん、川西正則さん（聞き取り調査）、かみね公園（ワニ種別問い合わせ）にご協力いただきました。

歴史民俗資料館大宮館
52-11450